

取り残された被災者救え

県警 がれきからの救出訓練



狭い災害現場に見立てたU字溝から被災者役を救出する県警機動隊員ら(県警提供)

災害救助の技術向上を旨し、県警は、八街市内の解体工事会社敷地内で、機動隊員ら約130人が参加して、がれきからの救出訓練を行った。同訓練は3回目、徐々に難易度を上げて実施。今回は被災者が取り残された狭い場所に隊員

らが入り込み救出するまでの手順や連携を確認した。訓練は、地震でビルが倒壊し多数ががれきの下敷きになったと想定。がれきを詰めたコンクリート製のU字溝内を狭隘(きょうあい)な現場に見立て、隊員らは人1人がやっと通れる隙間

をはって進みながら、中に取り残された被災者役を専用の機具で救出した。

県警警備課によると、隊員らは「被災者を安心させるには声掛けが重要」「チームワークの大切さを実感した」と感想を述べた。また、「救助に必死になり、声掛けや仲間への報告を忘れた」などとする反省の声もあったという。

訓練には佐倉や木更津など16署の署員も参加。一斉に動きを止めて、被災者が出すかすかな音を聞き分け助け出す方法を体験した。

同課の担当者は「真っ先に現場に到着する各署員が状況の詳しい確認ができる」と、スムーズな救助につながる。訓練を重ねることで救助に対する隊員や署員それぞれレベルを上げ、万が一の時に備えたい」とコメントした。